

平成27年度 玉名市立玉名中学校 学校経営「夢構想」
～学校が子どもたちの「夢への架け橋」になるために～

校長 太田 恭司

1 学校経営方針

(1) 学級経営を学校経営の礎とする。

学校の基盤は学級。学級の成長なくして学校目標の具現化は望めない。学級の成長には、1年後の目指す姿が必要である。ここに、1年間を貫く中心となる活動があれば、成長意識を持続することができる。

これを、「玉中至心活動」と名付けたい。これは、体育大会、文化祭等の学校行事を目標とする活動ではない。行事はゴールに向かうための学級が成長する手段である。失敗しても負けても、そこに至る過程に成長の証がある。これに教師は目を向けさせる。

(2) 「玉中至心活動」を軸に学級を成長させる

玉中至心（挨拶する心、清掃する心、学ぶ心、律する心、感謝する心）を、玉中の拠り所とする精神から、活動として位置づけることにより、新たな価値付けをする。そして、各学級で共有した1年後の目指す姿に到達するために、年間を通して行う学級の中心となる活動とする。学級が成長していく過程で育てていく力は、「自立、協働、創造」する力である。

現在の玉中が、価値あるものとして重点的に取り組んでいる「無音清掃」は、「玉中至心活動」そのものである。つまり、既に、玉中は学校を貫く「玉中至心活動」を、学校全体の価値ある活動として実践している。これまでの玉中が積み上げてきたプライドとエネルギーを実感できた。一人の意識が欠けてもなしえない姿である。実践開始当時の労力は計り知れないものがあったと推測できる。

1年生は、「玉中至心」の中の「清掃する心」を「玉中至心活動」として、統一した活動をすればよいのではないか。2、3年生で、既に、「清掃する心」としての「玉中至心活動」が、期待値に達していれば、学級裁量の「玉中至心活動」を、他の4つの心から学級の中心的活動に位置づければよい。学級の実態に応じて柔軟に取り扱い、実践しながら修正をかけていけばよい。

2学期制の強みを生かし、前期（基礎期、創造期）、後期（充実期、総括期）としたい。各期に、振り返りと次の期に向けた取組の重点を確認する学級会を設定する。4月は学級結団式（仮称）、3月は学級解団式（仮称）。

振り返りには、「清掃指導」で紹介された美化委員の作文のように、学級の生徒作文を活用すればいい。振り返りの方法としては、すばらしい実践である。

【「清掃する心」以外の玉中至心活動を実践する学級のために】

○ 玉中至心（挨拶する心、清掃する心、学ぶ心、律する心、感謝する心）活動の例

朝活動（内容自由）、学校ガーデニング（創造的菜園活動）、校内クリーニング（校内の気になるところを見つけて、整美する創造的美化活動、教室美化に命をかける等）、学級ハーモニー（心一つにする合唱）、創作活動等。玉中至心の5つのいずれかの心に結びつくものである。年間通して、「自立、協働、創造」する力が成長として認められるようなものであれば学級裁量でよいと思う。

（3）学級をマネジメントする

学級活動年間計画は重要だ。節目、節目（前期 基礎期・創造期、後期 充実期・総括期の4ステージ制）に、学級目標達成状況の学級活動を入れる。各ステージでPDCAのマネジメントサイクルで回していく。それに向けて、学級委員と打ち合わせをしていく。学級の成長の過程は、学級設営として可視化してほしい。全学級のインフラとして設営場所も含めて整備してほしい。

（4）教育課題に振り回されない教育をする

深層の教育である。表に現れている問題の根っこに目を向けることである。表層の指導だけでなく、深層の教育が必要である。例えば、話を聞いていないので、注意する。または、声をかける。これは、表層の指導である。話を聞かないのはなぜか。何か心配事があって集中できないのでは。または、教材の工夫や学習形態の工夫をしてみよう。深層の教育である。表層の指導と深層の教育のバランスを図っていく。これが、学校に向けられるあらゆる教育課題を一気にプラスに押し上げる手法である。これが、最大の危機管理にもなる。これを、生徒会と一体となって推進する。特別活動の手法で、学校、学年、学級経営を行う。

（5）「態度形成」の先に「意欲形成」を展望する

玉中が目指す、次なるステージである。これまでの先生方の努力で、すばらしい「態度形成」ができています。次なるステージに上るには、「意欲形成」を同時進行させることである。学校教育目標、学年教育目標を受けて、学級目標を設定する。学級目標は、生活目標と学習目標で構成する。この目標は、1年後の成長の証として目指す姿（ありたい姿）を設定する。これを、生徒会と一体

となった取組をする。

（６）ファーストコンタクトで勝負する

学級経営は学校の最前線であり、極めて重要な営みである。そこで、担任の生き方をかけた４月８日の第１声を大事にしたい。学級開きの担任の第１声は、学級の１年間を方向付ける。ここで、しっかり学校の方向を受けた学級の価値を目標として打ち込むことができれば、３月の出口を見通すことができる。４月の第１声の留意点（特別活動の目標との関連）としては、個と集団の２つの側面から目標を立ててみてはどうか。学年主任、副主任、副担任は、所属学年の学級のマネジメントを全力で支える。

（７）新たな学校文化を創造する

学校を取り巻く環境は変わっている。組織は、先取りして変化を起こしていかなければならない。そして、対応力を付ける。そうでないと、同じようなことを１０年もすれば、企業なら顧客が離れていく。学校はどうだろうか。企業と違うと言えるだろうか。違うという人もいるが、そうではない。確かに、義務制なら学校から顧客が離れることはない。ただ、私立、県立中へ流れるという離れ方はあるが、一部である。一般的に、離れることはない。しかし、心が離れていく。保護者、地域、関係機関等の心が離れていく。心が離れていくと、応援団から、無関心、もしくはクレーマーになる。だから、時代を先取りして、変化し続けたいといけな。魅力ある新たな学校文化だ。通って良かった。通わせて良かった。勤めて良かったと言われる、全体最適の学校を創造しなければならない。公立学校だから、法律の枠組みがある。しかし、その中でも最大の可能性を探っていきたい。

（８）多様性の受容と壁を作らない人間関係がイノベーションを起こす

組織の方針として大事にしたいのは、多様性の受容と壁を作らない人間関係だ。組織の構造はピラミッドだが、職を支える精神構造は逆ピラミッドである。２０～５０代、そして、女性の目線を柔軟に取り入れながら学校経営を行っていきたい。そして、全職員と新たな学校文化づくりのために、目指すものを共有していきたい。

（９）校務改革が本務に専念できる学校にする

そのためには、より異質な集団が集まって、知恵を出しあわなければならない。時間を生み出すことと仕組み作りが必要である。我々の本務は、授業を中心に、学校教育全般を通して、生徒と向き合うことである。だから、校務を大

胆に見直したい。見直すことで、本校が目指す姿に向けて、より効果が上がる
ことが、その判断基準だ。対象となるものは、重要度が低い（目的が曖昧、無
駄が多い等）。・効率が悪い等である。

(10) 10年後の生徒の姿を見据えた学校教育目標を設定する

学年は、学級の意思ある集合体でなければならないし、学校は、学年の意
思ある集合体でなければならない。つまり、学校は、学級が意思ある集合体にな
って初めて、目指す方向へ進み始める。そこで、平成27年度学校経営目標を
次のように設定する。

人間尊重の精神を基底に起き、知識基盤社会の中で、21世紀をたくましく 生き抜く生徒の育成

～自立、協働、創造を軸とした玉中至心活動を通して～

◎人間尊重の精神

生命の尊重、人格の尊重、人権の尊重、人間愛の尊重

◎知識基盤社会

平成17年の中央教育審議会答申（「我が国の高等教育の将来像」）が指摘する
とおり、21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会
のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識
基盤社会」（knowledge-based society）の時代であると言われている。

「知識基盤社会」の特質としては、例えば、①知識には国境がなく、グロー
バル化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生
まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知
識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる、④性別や年齢を問わず参画
することが促進される、などを挙げることができる。

◎自立、協働、創造

（自立） 一人一人が、多様な個性・能力を伸ばし、充実した人生を主体的に切り
開いていくこと

（協働） 個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かして、共に支え
合い、高め合い、社会に参画すること

（創造） 自立・協働を通じて更なる新たな価値を創造していくこと

今後は、「自助」（自立）を基本に据えながら、人々が主体的に社会参画し
社会全体で支え合う「互助・共助」（協働）を一層重要なものとして捉え、そ
れらが困難な場合に「公助」を必要とする社会、つまり、「一人一人の自立し
た個人が多様な個性・能力を生かし、他者と協働しながら次世代の社会を創造
していくことができる柔軟な社会」を目指すこととしている。さらに、個人や
社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かして、協働し高め合うことを通
して更なる新たな価値（イノベーション）を創造していく（創造）ことのでき
る柔軟な環境の構築を目指すこととなる。

◎玉中至心活動

玉中至心である「あいさつする心 清掃する心 学ぶ心 律する心 感謝す
る心」を育むために、学級の成長の中心となる活動を言う。

2 教育ビジョンと経営ビジョン

ア これからの時代の公教育のミッションを次のように捉える。

【公教育のミッション】存在意義

地域住民（保護者、生徒含む）に対して、学校教育目標の具現化を図ることにより、生徒の学力保障、進路保障を行い、地域の未来に貢献できるグローバル人材、イノベーション人材を育成する。

イ 自己評価シート、ワークショップの記述とこれからの時代に求められる生徒の資質・能力から、目指す生徒の姿となる教育ビジョンを次のように示す。

【自己評価シートの記述】

表現力、自主性、自ら考え行動する、主体性、積極性、協調性、仲間づくり、人間関係等

【ワークショップの記述】

自主性、意見を出す、夢を持つ、見通し、意欲、目標を持つ、自分の思いを伝える、発言力、自分たちでできる等

【求められる資質・能力】

これまでは、知識・技能を身につけたうえで、それを活用する力、すなわち思考力・判断力・表現力を身につけることが求められていた。これからは、それを更に超えて、主体的かつ協働的に課題を解決していく力が求められる。

【教育ビジョン】目指す生徒の姿

夢に向かって（自立）、仲間とともに（協働）、高め合う（創造）、“目指される玉中生”

ウ 目指す生徒の姿にするために、経営ビジョンとして、学校としての在り方を次のように示す。

【経営ビジョン】目指す生徒の姿にするための学校としての在り方

学級経営を学校経営の礎とし、「態度形成」の先に「意欲形成」を展望し、教職員と生徒会が協働して、学校が成長できる創造的な学級、学年、学校経営を行う。

エ 教育ビジョンである目指す生徒の姿に近づけるために、経営ビジョンを常に意識した教育活動を展開することが、学校総体（組織体）としての動きである。これを、一般に「ベクトルをそろえる」と言い、組織が一人一人の教職員の労力の総和を上回る成果をあげる最も重要な要因である。